

【原 著】

ラオスにおける体験型学習を通じた教員意識の変容
—ベンガラ染めワークショップの実践と教員へのインタビューを通じて—

宮本 あゆは 梶本 夏未 Vongheuangsy Bounpaserth 原 祐一

Transforming Teachers' Attitudes through Experiential Learning in Laos
-BENGALA dying workshops and the experience with local teachers-

MIYAMOTO Ayuha, KAJIMOTO Natsumi, VONGHEUANGSY Bounpaserth, HARA Yuichi

2024

岡山大学教師教育開発センター紀要 第14号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.14, March 2024

ラオスにおける体験型学習を通じた教員意識の変容

—ベンガラ染めワークショップの実践と教員へのインタビューを通じて—

宮本 あゆは※1 梶本 夏未※1 Vongheuangsy Bounpaserth※1 原 祐一※2

ラオスの学校制度は、初等教育全般において「体験型学習の提供」を求めている。実技教科では体験型の授業が実践されているが、それ以外の教科では座学中心の授業である。その背景には、体験型学習の行い方がわからないといった教員の課題意識がある。本研究では、特に教員の授業づくりに対する課題意識を引き受け、ラオスにおいて体験型学習を協働実践し教員意識の変容を明らかにすることとした。具体的には、ラオスの小中学校2校で、体育の授業で使うTシャツをベンガラ染めする体験型学習を行った。教員にも参加してもらいながら、体験型学習を経験すると同時に協働実践することで、どのように意識が変容するかを検証した。検証方法は、実践校2校の教員に対する半構造化インタビューである。その結果、教員らは体験型学習の可能性を理解した一方、座学中心の授業から体験型学習へ転換の方法がわからないという意見もあり、今後の課題となった。

キーワード：体験型学習，ラオス，ベンガラ染め，持続可能な教育

※1 岡山大学大学院教育学研究科大学院生

※2 岡山大学学術研究院教育学域

I はじめに

本研究は、ラオスにおける体験型学習の実践、教員へのインタビューを通して、ラオスの教員が抱く体験型学習実践の可能性と課題を明らかにすることを目的とする。瀧田(2008)によると、ラオスにおいては教育セクターの分権化が進んでいるものの、ラオス教育省の制約になっている問題は、不十分なリソース、教育スタッフの低賃金、教員数の不足、県教育局・群教育事務所レベルでの政策決定と協調、政治的要因によるリソース配分、教育の分権化に伴った法制度、ガイドラインの不備等が指摘されている。また、教育省行政官が指摘する、ひっ迫する中央の財政問題を地方教育行政に転化している点などが挙げられている。ラオスの教育の実情として、日本の文部科学省に当たる教育省による中央集権が十分に機能しておらず、教育課題に地域格差、あるいは同地域内での学校間格差が生じている。本研究では、ラオスの都市部と地方部の両方でワークショップを行うことによって、国内格差への取り組みの一助となることも企図している。

本稿は、国際協力、ラオスでの教育における先行研究を述べ、当該国の現状を述べる。さらに本研究において行ったワークショップの概要を記述した後、

教員に対するインタビュー結果並びに考察を述べる。以上のことから、ラオスの小中学校教員が、外部講師による体験型学習の実践をどのように捉え、またどのように自身の実践に意味づけるのかを明らかにする。

II 先行研究

1 国際協力における先行研究

ラオスの教育機関における授業実践は、一般社団法人や NGO 法人などが主体となって取り組んでいるものがほとんどである。貝塚(2023)は、ラオス国立美術学校とラオス国立大学に対し、一般社団法人 Social Compass が行った映像制作ワークショップの実施報告をしている。また、小野(2023)は、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会がラオスの複式教育で行った事業を基に「日本の教育経験」を応用する意義を明らかにしている。

一方で、国際協力を教育の文脈で行う際には、慎重になるべき点が多いことも事実である。川口(2021)は、実際に国際教育協力の現場で起こった事例として、外部からの文化の押し付け、異なる立場の内部者(教育実践者)が有する葛藤、経済と文化の相克、教育終了後の社会での貢献があることを指摘する。

教科における国際協力の先行研究として挙げられるのが守屋(2022)である。守屋(2022)はカンボジア教育省の教科書開発者を対象に、成人教育論に基づく研究プログラムを開発・実践し、その学びを評価している。それによると、社会科研修のデザインには理論的根拠が必要であること、学習者の自律性や専門職性をふまえた指導と評価に基づいて研修デザインされるべきであることを明らかにした。また大坂ら(2019)は、国際協力の研修主体に対して、研修プログラムの基礎となる理論的枠組みを開示するとともに、それを具体化する「デザイン原則」の明示化、体系化を試みている。そして、プログラムに「デザイン原則」を媒介することによって、とりわけ先進国と途上国の関係において不可逆的な関係が支配しがちな関係を解消しようと試みている。

以上のことから、ラオスの教育機関における実践は、法人のような信頼性が高い団体でないと実施することそのものが困難であることがわかる。さらに、教育における国際協力を行うにあたっては、ラオスの学校現場の理解をしつつ「日本の教育経験」を応用する必要があると指摘できる。文化の押し付けや実践を行う国の内部事情や「教える側」と「教えられる側」という不可逆的な関係に支配されないようにすることにも留意する必要がある。プログラムの理論的根拠や学習者の自律性や専門職性をふまえた指導を行うことで、これらの非対称性の解消を企図できると考えられる。

2 ラオスの体験型学習の現状

ラオスの学校制度は初等教育5年、前期中等教育4年、後期中等教育3年、高等教育4年から成り、内、義務教育に当たるのは初等教育の5年である。加えて、日本の学習指導要領に当たる『Five Corners Star』が制定されている。その中で、初等教育の全学年に「体験型学習の提供」を求めている。初等教育

における教科の内訳は、数学、国語、地理、歴史、政治、英語、図画・工作、音楽、体育、家庭科、技術（コンピューター）、自然科学（生物、物理、化学）である。そのうち図画・工作、音楽、体育、家庭科といった実技教科においては、アクティビティが取り入れられている。例えば図画・工作は、各週1時間ずつ設けられ、生徒らは絵を描いたり、彫刻を行ったりする。しかし、画材などの材料調達に係る資金は教員が負担しているという現状もあり十分な教育環境が整えられているとは言い難い。加えて、教員の給与が少額で、支払いが遅れることも往々にあることから、積極的に取り組むことが難しい現状がある。中学校では、図画・工作がキャリア教育に統合され、職業訓練の色が強くなる。具体的には、月に1度のペースで箒や枕といった日用品の製作を行う。

こうした実技教科は生徒らの体験をベースとしているが、それ以外の教科は座学一辺倒である。実際にラオスの中学校で行われている授業観察を行うと、どの教室も、先生が前に立って教鞭をとり、生徒は皆先生の方を向き、黒板に書かれた文法の暗記、基礎的な計算の演習を行うなど教師主導の授業が行われている。生徒は決められた一つの答えや教員に求められている答えを考えることが中心となり、自分自身でオープンエンドな問いについて考える機会はほとんどない。

このような現状に対し、ラオス基礎教育開発に対する日本の国際協力としては、JICAによる「ラオス理数科教員養成プロジェクト（SMATT）（2004-2008）」が最も大きな教育支援として行われてきた。そこでは、教育インフラの拡充、就学率に代表される教育のニーズの拡大、教員数の増加やその質の改善、教育資材の充実のような教育の質の向上等が課題であると指摘されている。また、教育課題として教育の民族格差、通学路のアクセスの悪さ、教育施設の老朽化、へき地校の教員不足、教育に対する家庭の理解の低さや経済的負担もあげられる。

Ⅲ ワークショップ構成と実施

1 ワークショップの構成

ベンガラ染めワークショップの構成は以下のとおりである（表1）。

表1 ワークショップの構成

授業構成	学習活動
【他教科との学習内容の結びつき】 ベンガラとは何か なぜベンガラで T シャツが染まるのか（理科） どのように模様をつけるのか（美術） どのように染めるのか（美術）	掲示されているイラストや写真を見ながら、説明を聞く。
【創造性を働かせる】 T シャツの模様付け（美術）	輪ゴム等を用いて、思い思いに T シャツを縛り、模様づけする。

【創造性を働かせる】 T シャツをベンガラで染める（家庭科）	複数の色の中から自分が色を選択し、思い思いにベンガラ染めをする。
【多様性を実感する】 それぞれが製作した T シャツで体育の授業を受ける（体育）	自分が製作した服を着用し、体育の授業を受ける。お互いの T シャツの違いを認識する。

授業構成である【他教科との学習内容の結びつき】【創造性を働かせる】という部分については、実際に筆者たちが現地の学校に赴き、実施する部分である。それ以降の【多様性を実感する】の段階については、後日現地の教員によって行われ、その映像を送付してもらうことで検証した。

2 ワークショップ内容の選定理由

ベンガラ染めを用いた理由としては、体験型学習を行うに適した安全性と、教材としての適性、そしてラオスでの持続可能性が挙げられる。

まず、体験型学習を行う際のベンガラ染めの利点として、子どもたちに及ぶ危険性が限りなく低いことが挙げられる。子どもたちが自由に T シャツを染める際に創造性を発揮し、参加・体験を促し情操教育を目指す本ワークショップにおいて、できるだけ子どもたちに指示をしない環境をつくることは必要不可欠である。ベンガラ染めは一般的な草木染と異なり、火を使用することなく、水と染料だけで染物を行うことができる。また、染料が口に入ったとしても、身体への悪影響はない。さらに、ベンガラ染めの原材料は土とそれに含まれる酸化鉄であるため環境に負荷をかけない。そのため、染める作業が終わった後の染料は、そのまま土に返すことができ、SDGs を実現する染め方である。

次に、ベンガラ染めが教材として適していることが挙げられる。ベンガラ染めは先述した通り、酸化鉄を含む土であり、酸化の具合によって赤や黒など様々な色に変化する。このような染料が多様な色に変化している過程には、酸化還元反応が利用されている。また、ベンガラ染めが染まる原理はアルカリ性の下染め液で下染めした T シャツと、酸化鉄である染料が結合することによる。これらの原理は理科（化学）の授業で学ばれている。そのため、理科の教科内容と関連づける実践をすることによって、より深い学びに繋げることが可能である。さらに美術教育や家庭科教育、体育科教育とも連携することによって、教科横断的な学びにも繋がる。

最後に、ラオスにおける持続可能性が挙げられる。ベンガラ染めの原材料は先述したように、土とそれに含まれる酸化鉄である。それらはラオスに多くある赤土から採集可能である。今後、外部からの支援なくベンガラ染めを授業に取り入れることができる可能性を有するとともに、産業支援にも繋がり得ると考えている。

3 ワークショップの実践

(1) ワークショップ実施に当たる手続

本ワークショップは、ラオス教育省からの許可を受けて実施した。ラオスでは許可を受けなければ外部の人間が学校に入ること、さらに授業を行うことはできない。本研究を行うにあたり、実施校、並びにラオス教育省に対してカバーレターを送付し、許可を受けたうえで実践を行った。

2022年12月22日から29日にかけてラオスの小中学校で実際にワークショップを実践した。

(2) Pakham Primary school でのワークショップ

2022年12月23日ヴィエンチャン県にある小学校 Pakham Primary School でワークショップを実施した。全学年2クラスずつ、合計10クラスに対して行った。

まず、写真1のように衣服を染める手順をイラストと文字で記載して掲示し、それに沿って口頭で子どもたちに説明をした。その際に、染料であるベンガラの概要や使われている事例、染まる原理を説明することによって、子どもたちがワークショップを行う中で知識を学ぶことができるように工夫した。

写真2, 3のように基本的には児童が自由に模様をつけ、色を染める形でワークショップを進行した。しかし、作業の中で下染め液に付けたTシャツをしぼる作業やきつく結んだ輪ゴムを外すことが力の関係で難しさを感じる児童についてはチームメンバーや現地教員が補助を行った。

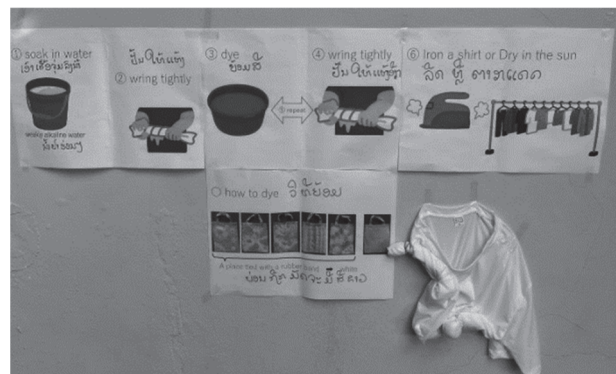


写真1 手順説明



写真2 児童と交流する様子

写真3 鮮やかに染まったTシャツ

(3) Banmoud Secondary School でのワークショップ

2022年12月26日に、ルアンパバーン郡にある中学校 Banmoud Secondary School でも同様に、ワークショップを行った。2クラス×4学年、合計8クラスに対して実施した。小学校同様染物の手順とベンガラの概要、染まる原理について説明をした。特に中学校4年生では科学の授業があるため、日頃の座学の学びとリンクする部分が多いことに留意した。

ワークショップの開始時、「自由に色や模様をつけてもよい」としても、生徒たちは自分のつける模様が「正しいか」や、「求められているもの」であるかを教員に伺う様子が見られた。しかし、ワークショップが進行するにつれ、生徒自身がTシャツを染める方法を考える姿や、それに伴うクラスメイトとの助け合いやチームメンバーとの交流が見られた。例えば、事前の説明の中で提案した模様のつけ方はじゃばら折りと輪ゴムで縛るという二点であったが、写真4のように、手を染料のボウルの中に付けて水しぶきを飛ばすようにすることで模様をつける方法を思い付き実践し始めた。それを見た生徒が自分も同様の模様をつけたいと、ペアになって片方がTシャツを持ち、片方が模様をつけるといったアイデアを形にする助け合いが見られた。



写真4 新しい模様の付け方を編み出した生徒

IV 結果と考察

1 検証方法

実践を行った2校の教員の内訳は、以下のとおりである。中学校5名（うち実技教科担当1名）、小学校5名、計10名に対して、半構造化インタビューを行った。ラオスの公用語はラオ語であるため、質問項目を検討した後に英語に翻訳し、チームメンバーがラオ語でインタビューを行った。また、インタビュー結果をチームメンバーがラオ語から英語に翻訳し、チームメンバーが日本語訳を行った。質問項目は以下のとおりである。1) 本ワークショップをどのように捉えましたか、2) 創造性を発揮するような同様のワークショップを自身でも実践したいと思いましたが、3) どうしてそう思いますか、4) もし実践す

る場合、どこでどのように行いますか、5) このような体験型のワークショップを実践したいと思いますか、6) どうしてそう思いますか、7) もし実践する場合、どこでどのように行いますか、8) 子どもたちは自分の染めた服を体育で着ることによってどのような反応を示していましたか。

表2 対象者属性表（小学校・中学校教員）

対象者	校種	担当学年/教科
A	小学校	1年
B	小学校	2年
C	小学校	3年
D	小学校	4年
E	小学校	5年
F	中学校	数学
G	中学校	家庭科
H	中学校	ラオ語
I	中学校	ラオ語
J	中学校	英語

対象者は、本研究の実践でワークショップを見学・参加した小中学校教員10名である。表2は対象者の属性をまとめたものである。小学校教員は担当学年、中学校教員は教科担当性をとっているため、担当教科を記載した。なお、インタビューの協力は任意であることと、個人が特定されたりする事がない旨、インフォームドコンセントを行なった後に実施した。

2 検証結果

(1) 分析の視点

分析は、本研究における「成果」と「課題」の視点から行う。

(2) 成果

教員がワークショップでどのような面を好意的に捉えたかは、以下の通りである（表3）。

表3 ワークショップの意義

対象者	ワークショップの意義
A	来訪者が来たこと
B	来訪者が来たこと
C	来訪者が来たこと ソーシャルスキルを鍛えられた
D	外国人が来訪したことがとても良かった
E	他者（特に外国人）との交流

F	生徒それぞれが違う結果であることを楽しんでいた
G	生徒と教員と一緒に楽しめるという点がよかった
H	同僚とともに教員自身も楽しめた
J	生徒が楽しんでいた
K	来訪者が来たこと 自分自身で色を選ぶことに自信を持つようになっていた

本調査で語られた、本ワークショップの意義は、他者との交流、活動の楽しさ、多様性という3つの項目に整理することができる。

【他者との交流】

小学校教員 E 氏の語り

I: 私たちのワークショップについてどう思いましたか？

E: 私たちはとても気に入りました。あなたたちのワークショップを2か月心待ちにしていました。子どもたちは先生たちや家族よりも他者…(1) 特に外国人との交流ができるという点でよいワークショップだと思います。 私は子どもたちが(2) 恥ずかしがらなかったことを誇りに思います。 よいソーシャルスキルです。

小学校教員 E 氏は(1)のように家族や教員など普段子どもが生活でかかわる人物でなく、外国人と交流する機会を持つことができたという点に意義があると捉えている。また、(2)のように、本ワークショップを通じて子どもたちが初めて会った人であっても恥ずかしがらずに交流するというソーシャルスキルを再確認し、その姿を評価している姿が見られた。特にラオスは、学校教育の中に他者が入ることが無いため、このような評価が現れたと考えられる。

【活動の楽しさ】

中学校教員 G 氏の語り

I: 私たちのワークショップについてどう思いましたか？

G: 私は子どもたちがとても楽しんでいるのがわかりました。(3) 私たち教員もまた楽しむことができました。 なぜなら(4) 私たちはたいがい子どもたちが割り当てられた活動を観察しているだけだからです。

中学校教員 G 氏は(4)のように日頃の授業における生徒が割り当てられた活動を観察しているという状況を振り返った上で、子どもだけでなく教員自身も楽しむことができる点について(3)のように意義を見出していた。この点において、中学校教員 G 氏は授業スタイルの考え方について子どもたちに課題を割り当て、その様子を観察するのみという考え方から、子どもだけでなく教員自身も楽しみながら授業をするというスタイルに考え方が変容したと捉えられる。

【多様性】

中学校教員 K 氏の語り

I: 私たちのワークショップについてどう思いましたか？
K: 私たちはあなたたちと会いとても良い時間を過ごすことができ、うれしかったです。今まで、私たちに来訪者はいませんでした。生徒たちはワークショップをするまでの2か月の間、あなたたちが来るのかどうかいつも尋ねてきていました。(5) <u>私たちの生徒は、はじめはどのように服を染め、模様をつけるかに消極的でしたが、その後は(6) 私に尋ねたり、友人を見たりすることなく自分たちで決めた色に自信を持っているように見えました。私は彼らが(7) 自信を持つことを学ぶことの良いスタートであると思います。</u>
I: 生徒たちの創造性を発露させる授業に挑戦してみたいと思いますか？
K: はい、そう思います
I: 理由をお聞きしてもよいですか？
K: 私は生徒たちにもっと外国人と出会ってほしいです。そして彼らに英語を話せるようになってほしいです。そして恥ずかしくないでほしい。彼らには(8) <u>自信が必要です。</u>

中学校教員 K 氏は (5) のように子どもたちが自分の答えが正しいかどうか自信がなく、教員に正解を尋ねたり、友人の様子を確認したりすることに対して不安視していた。また、(7) (8) のように「自信」という言葉を使っており、生徒たちに自信を持ってほしいと感じていると解釈できる。(5) から (6) のように子どもたちが教員に正しい答えを伺おうとしたり、友人と足並みをそろえなければならないのではないかと顔を伺ったりするなどの動作がなくなったことを見て、子どもたちが本ワークショップのように正解のない活動に出会い、自分自身の決断に自信を持つように変化するということに対して意義を感じていることが読み取れる。

(3) 課題

本研究において、特に体験型の授業に関して、体験型授業を教員自身が実践できるようになることについては課題が見つかった。

表 4 体験型の授業を実践したいかどうかに対する回答

対象者	体験型の授業を実践したいか
A	児童には早すぎる
B	児童の創造性と決断力を育てたい
C	早すぎると思うができる限り挑戦している
D	できる限り挑戦している
E	できる限り挑戦している
F	挑戦したい

G	できる限り行っている
H	やっているが限界がある
J	行いたい
K	行いたい

教員の回答は、発達段階から早すぎると考える、挑戦しようとしている、行いたいという3つの回答に整理することができる。特に小学校教員の回答はおむね児童の発達段階から体験型授業を行いたいとは思わないという回答が代表的であった。特に小学校低学年を担当する教員が体験型授業に関して子どもたちには早すぎるのではないかと感じていることが明らかになった。以下、整理した分類に該当する教員の語りである。

【発達段階から早すぎる】

小学校教員 A 氏の語り

I: 体験型の授業を実践してみたいと思いますか？
A: いいえ。子どもたちには早すぎると思います。
I: なぜそう思いますか？
A: 児童たちはとても小さすぎます。彼らのうちの何人かは (9) <u>細かい作業を完璧にこなすことができません</u> 。また、(10) <u>自分たちの世話もまだできていません</u> 。

A 氏が児童に体験型授業を行うことに感じている障壁は、(9) (10) から読み取ることができる。体験型授業の「細かい作業を行うこと」「自分たちの世話ができない」という点に対して、体験型授業を行うことのハードルであると捉えていることが読み取れる。

【できる限り挑戦している】

小学校教員 E 氏の語り

I: 体験型の授業を実践してみたいと思いますか？
E: はい。できる限り挑戦しています。
I: なぜそう思いますか？
E: 私は彼らに (11) <u>教室の整理、花壇の手入れ、食後の皿洗い</u> をさせています。彼らは時々キッチンでも手伝ってくれるので、料理の仕方や食べ物の扱い方を (12) <u>小さいレストランで働くかのように経験する</u> ことができます。特別な状況では、学校が文化的なワークショップを行うこともあります。私たちはちょうど12月の初旬に浮き火船ワークショップを行い、川に船を持っていき年間行事を行いました。彼らはまた (13) <u>特別な行事の装飾品を作成したり、食べ物を作ったりすることを学びました</u> 。

E 氏はできる限り挑戦していると回答した。E 氏は体験的な授業として (11) のように「教室の整理、花壇の手入れ、食後の皿洗い」そして (13) の

ような特別行事に合わせた装飾品や料理をつくることの4つの活動を挙げている。また、(12)「小さなレストランで働くかのように経験する」という言葉から、E氏は体験的な授業を通して「子どもたちの文化的な体験」「就業体験」「生活に必要な技術の習得」を目指していると解釈できる。E氏のできる限りという言葉の中には、先述した小学校のような発達段階からできる活動に限られる中で、子どもたちに上記のような体験をさせることを目指していると考えられる。

【行いたい】

中学校教員H氏の語り

I:体験型の授業を実践してみたいと思いますか？
H:はい。しかし、限界があります。
I:なぜそう思いますか？
H:あなたもご存じのように、(14) <u>すべての子どもが詩や物語を書くことができるわけではありません</u> 。また、ラオスで作家としてよい収入を得ることは大変です。そのような理由から、(15) <u>多くの親はもし子どもが作家になりたいと思っても、それをサポートしたいと思うでしょうか</u> 。

中学校教員H氏は詩や物語を実際に書く体験を通して言語を学ばせようとするものの、(14)(15)から「文章作成能力の差」「経済的事情」という二点からハードルがあると考えている。特に(15)からは、H氏が「学校での教育活動」と「就業」を強く関連性があると捉えていること、また保護者が学校での教育にそれらを期待していると捉えていることが示された。

2 全体考察

本研究においては、創造性を育む授業をラオスで行うにあたり、以下の成果と課題が明らかになった。まず、成果として、ラオスの教員は本ワークショップを「創造性を育む授業」や「体験型授業」としてだけでなく、「外国人との交流」や「生徒・教員自身が楽しむ」という点において教育的意義を感じていた。さらに、小学校教員においては「発達段階」によって体験型授業を行うハードルがあるということ、中学校においては「創造することの能力差」「経済的事情」を意識することが明らかになった。体験型学習として小学校教員が実践する活動の中に「生活において必要な技能の習得」「就業において必要な技能の習得」といったような要素が見られる活動を行っていることから、ラオスの教員にとって「学校での活動」と「卒業後の就業」につながりを見出していると考察できる。

本調査を踏まえ、ラオスの学校における体験型授業の実践については特に中学校の実技教科以外の教科において難しさを感じていることが明らかになった。一方で、本調査を通じて教員自身がこのような実践を完全に諦めている訳でなく、測量や詩の制作を通じた体験型授業を取り入れようとしていることも示さ

れた。また、体験型授業が要請されている小学校では子どもたちが臆することなく自由に色を選んでいたり、中学校で見られた生徒の自由に色を選ぶことに対してのためらいや教員の顔をうかがう様子が見られた。その原因として、特に中学校ではこのような体験型授業や創造性をはぐくむ授業に対して教員が困難さを感じ、実践できていない可能性が見取れる。換言するならば、体験型授業や創造性をはぐくむ授業が、子どもたちの積極性や自信を涵養していく可能性を有しているとも言える。

ラオスの教員による体験型の授業実践を今後行うにあたって、課題となったのは、小学校では「発達段階」を考慮すること、中学校では「知識と体験をどのように結びつけるか」「決まった正解のないものをどのように子供に自信を持たせるか」ということに留意しながら実践する必要がある。それに際して、支援者の考える「体験型」「創造性」を育む授業と、ラオスの教員が捉える、さらにラオスの教育が抱えている社会背景との調整や、言葉のニュアンスや授業実践の仕方に齟齬がないよう時間をかけて協働的に行なっていく必要があることが示された。

V 今後の展望

本研究での到達点としては、ラオスの小中学校における体験型の授業実践と教員に対するインタビュー調査を行うことを通して次のことが示された。「体験型学習」「個別的知識と創造性を結び付けた授業」という点において、ラオスの教員と筆者たちの授業イメージや資質能力イメージといった認識の違いを明確にしながら擦り合わせる必要があること。体験型学習を言語系教科において創造性を働かせながら授業実践するための困難さを引き受け、新しいモデルを提示していく必要である。つまり、ラオスにおける持続可能な体験型学習のあり方を考える際の課題として、教員らは体験型学習を実践したいという意欲を持っているものの、体験型授業を行うノウハウやレessonプランが浮かびにくいという点を明らかにしたことになる。これらを踏まえ、今後ラオスの小中学校教員が創造性を育む体験型学習を実践できるようにするために、ラオスの教員が自身の担当教科をどのように捉えているのかといった、その教科観や指導観を明らかにした上で、連携協働していきながら新たなモデルを開発していくことが今後の実践的課題として残された。

参考・引用文献

- 貝塚乃梨子(2023) ラオスにおける映像制作を通じたクリエイティブ教育の事例. デザイン学研究特集号, 29 巻 2 号, 78-81.
- 小野豪大(2022) ラオスにおける教育改善の実践と国際教育貢献. 国際教育, 28 号, 100-107.
- 川口純(2022) 持続可能な開発のための教育の理念と実態—国際教育協力における「文化の居場所」について—. 関根久雄編, 持続可能な開発における文化の居場所—「誰一人取り残さない」開発への応答—. 春風社, 239-260.

守谷富士彦(2022) 成人教育論に基づく社会科研究プログラムの開発. 社会科研究, 第96巻, 1-12.

大坂遊・桑山尚司・守屋富士彦・草原和博(2019) 教科書開発者の専門性を高める研修プログラムをいかにデザインするか—カンボジア教育省社会科教科書改訂プロジェクトを例に一. 学校教育実践学研究, 第25巻, 93-108.

Khammouan Sitpaserth(2019-2020), ວິຊາ: ຫລັກສູດແລະການສອນປະຖົມ 1, ປະລິນຍາຕີ ລະບົບ 12+4 (Bachelor Degree Program 12+4) (<https://online.pubhtml5.com/gpnv/vdhc/#p=1>)
<https://online.pubhtml5.com/gpnv/vdhc/#p=1>

瀧田修一(2008) 第7章ラオス：貧困削減に向けた基礎教育支援. 廣里恭史・北村友人編著, 途上国における基礎教育支援—国際的なアプローチと実践—. 学文社, 185-216.

小野豪大(2022) 課題研究Ⅱ「SDGsの展開と開発途上国の教育実践」ラオスにおける教育改善の実践と国際教育貢献, 国際教育, 第28巻, 100-107.

Transforming Teachers' Attitudes through Experiential Learning in Laos
BENGALA dying workshops and the experience with local teachers

MIYAMOTO Ayuha *1, KAJIMOTO Natsumi *1, VONGHEUANGSY Bounpaserth *1, HARA Yuichi *2

The Lao school system calls for the “provision of experiential learning” in all aspects of primary education. However, while hands-on learning is practiced in practical subjects, other subjects remain classroom-based. One of the reasons for this is the teachers’ awareness that they do not know how to conduct hands-on learning. In this PBL, we took on the problem consciousness of Laotian teachers in particular regarding class creation and clarified how teachers’ consciousness would change through the collaborative implementation of experiential learning in Laos. Specifically, we conducted hands-on workshops at two elementary schools in Laos to dye T-shirts for physical education classes as part of the emotional education program. Teachers were also invited to participate in the bengara-dyeing workshop, and we examined how their awareness was changed through the experience of hands-on learning and collaborative practice. Semi-structured interviews were conducted with teachers at the two schools where the workshop was conducted. The results showed that the teachers viewed the workshop positively in regarding the interaction with foreign visitors and enjoyment and fun through learning. While they understood the potential of experiential learning, some of them did not know how to convert their classroom-based courses to include this form of experiential learning, which is an issue to be addressed in the future.

Keywords: Experiential learning, Laos, BENGALA dyeing, ESD

*1 Master' s degree program student of Graduate School of Education, Okayama University

*2 Faculty of Education, Okayama University
